

## 令和5年度第2回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：令和5年10月27日（金） 午前9時30分～11時30分

■開催場所：京都市立西京高等学校

■議題：

京都市立西京高等学校と連携した市民参加推進の取組について

■公開・非公開の別：公開

■出席者：市民参加推進フォーラム委員 9名

（荒木委員、金田委員、篠原委員、並木委員、平田委員、松井委員、三宅委員、村田委員、森川委員）

■傍聴者：2名

【議事内容】

### 1 開会

<事務局>（本日の予定等について説明）

本日の見学の流れとこれまでの経過について説明する。

若い世代に身近な社会課題について考える機会を持つことで、将来の市民参加につなげる裾野拡大を目的に、西京高等学校の公共の授業と連携を進めてきた。

まず、8月に、課題の提供者として産業観光局観光MICE推進室が授業を行い、「みんなでつくる京都観光」冊子等を用いて、京都市における観光の現状を示すデータの紹介や、観光課題とその対策などについて説明した。

そのうえで、特に観光課題が顕著な6つのエリア「嵯峨・嵐山」「伏見」「衣笠・北野・西陣」「市内中心部」「京都駅周辺」「祇園・清水エリア」について、具体的に発生している課題について解説した。嵯峨・嵐山エリアであれば竹林の小径における竹への落書き、市内中心部エリアであれば錦市場における食べ歩きによるごみのポイ捨てといった内容を説明し、それに基づいて生徒たちが関心のあるエリアを決めて2～4名程度のグループを構成して、計6回の授業で対応策を検討してきた。

本日は、その検討結果を発表するものである。なお、発表はポスターセッション形式で実施し、9班が説明を行う。適宜分かれて発表を聞いていただき、質問等を積極的に行ってもらいたい。

<荒木委員>

- ・ 「公共」は必修科目か。

<事務局>

- ・ 必修科目である。全ての生徒が履修するが、今回の取組は学校との調整の結果2クラスで実施している。

～「公共」の授業（発表会）を見学～

## 2 議題 京都市立西京高等学校と連携した市民参加推進の取組について

<森川座長>

- ・ まずは、見学していただいた授業に対する感想を共有したい。

<平田委員>

- ・ 高校2年生は、コロナ感染拡大の時期に入学した学年かと思う。コロナであまり活動できなかったことを一切感じさせず、秋休みの期間も自主的に調査等の活動をされており、西京高校らしいカラーを感じられる「公共」の授業だったと思う。

<松井委員>

- ・ 一番最初に、伏見稲荷周辺のゴミ問題解決に向けて検討するチームの発表を聞いた。自身も深草支所管内の学区にあり、観光バスで道路が混雑するといった問題について、稲荷学区も含めて一緒に話し合っている。普段は大人が議論しているような内容を高校生もしっかりと考えており、逆に大人側にとって良い話を聞かせてもらったと思う。高校生の提案を持ち帰り、実現できるように話をしていきたいと感じた。

<村田委員>

- ・ 2年前から市民参加推進フォーラムの委員をしており、若い頃から市政に関心を持ち、社会課題を自分ごとにしてもらうために高校の授業と連携することになったという経過がある。今回、高校生の発表を拝見し、高校生の市政参加の形が現実化できたのが素晴らしいと感じた。
- ・ イメージだけではなく、予算がいくらかかるかを検討したり、データを活用するなど、客観的な事実に基づいて具体的な提案をされていることは、高校生が現場の課題を自分ごととして捉えられている証拠であると実感できた。

<三宅委員>

- ・ 自身も大学生になってから主権者教育の授業に関わっている。主権者教育の課題は一過性になってしまうことであると感じている。今回のように、8月から取組を開始し、2箇月かけて実際に現地調査等を行いながら検討してきたことは、高校生の生活とも結びつき、市政参加の第一歩となる授業だったと思う。

<篠原副座長>

- ・ 今回は観光課題をテーマとしていたが、京都の観光を考える場合、外国人観光客が悪いとされがちである。今回は、俯瞰して観光客と京都に暮らす人の双方にとってより良くなる方法を検討されており、高校生のフレッシュな感性だからこそ提案できる内容だったところが良かった。
- ・ 提案の実現可能性については、先生も授業の中で難しいとおっしゃっていたが、例えば、予算を組む前に京都市職員に聞いてもらえる仕組みにすれば、高校生の提案が反映されるなど、より市政参加の達成感につながると思うので、来年度以降に検討できれば良いと思う。

<荒木委員>

- ・ 教育関係の仕事をしていることもあり、授業設定の観点から感想を述べたい。西京高校の生徒は忙しく、直近では文化祭の準備を熱心に行っていたという生徒の話も聞いた。そのような中、現地に調査に赴いたチームがいたのはさすがだと思った。
- ・ 一方で、テーマ所管部署からデータを提供するなど、客観的な二次情報を提供できており、さらに生徒自身が一次情報を取りにいっているところが良かった。また、テーマ所管部署からのフィードバックの中で、国でのオーバーツーリズムに対する言及について紹介されていたが、相当よくニュースを見ている高校生でないと気が付かないため、あのようなフィードバックの内容も含め、初回の授業としては総じて良かったと感じた。
- ・ 西京高校の生徒は優秀で、プレゼンテーションにも慣れている。全員がそうではないが、小手先でできてしまう人もいるだろう。「公共」の授業と市政参加の共通点は「当事者性」であるため、来年度に向けて考えるとすれば、当事者意識を持ってもらうために、いかに高校生に響く内容にするかである。まだ答えは見つかっていないが、来年度に向けて考えていきたい。

<傍聴1>

- ・ 別の学校であるが、子どもが高校2年生で、先日、探究の授業で発表していた。今回の「公共」の授業を見学して、まず自分が住んでいる地域の課題を考えて、解決策を検討し、さらに行政からフィードバックをもらえるという体験を高校の授業でできるということは、このような力を培ってから社会に出て活躍されるということで頼もしく感じた。

<傍聴 2 >

- ・ 以前、市民参加推進フォーラムの市民公募委員をしていた。その当時よりも、若い人に市民参加を広げることが着実に推進されており、すごいと思った。
- ・ 京都市の観光課題というテーマは、授業でおりにてきたものだと思うが、生徒の発表のテーマ自体は、自分が普段利用する交通機関だから、住んでいるところに近い地域だからという理由で選ばれており、しっかりと身近な着眼点に引き寄せて考えているところが市民参加の第一歩だと思う。
- ・ 欲を言えば、提案に対して京都市がどこまで変えたのか、変えられなかったのかを確認するなど、さらにステップアップの市政参加ができれば、授業を超えた市民参加になると感じた。

<森川座長>

- ・ 2箇月という限られた時間と限られたデータと資料の中で、ここまで内容をまとめて発表されていた点は素晴らしかった。
- ・ 一方、京都市に観光客が多いそもそもの理由には、歴史的・文化的背景もあると思うが、そこまでは考えが及んでいないところは高校生だなと感じる部分であった。
- ・ 今回の連携授業は、来年度以降に他の市立高校への展開を予定している。それに向けて、出講していただいた観光 MICE 推進室の担当者から感想や知見を得られていれば、次回会議の際に事務局から共有してもらいたい。

<荒木委員>

- ・ 高校生の発表を聞いていると、アイデアとしては面白いが、課題の掘下げが足りないと感じるものも多かった。市民参加推進フォーラムで議論に用いているロジックモデルほど精緻でなくても良いが、高校生にもなぜこのような問題が起きているかという背景を掘下げるワークをしてもらう必要があるのではないかと思った。
- ・ 課題の解決のために、お金を持っている企業に協力してもらえば良いという発想のチームも多かった。どこまで伝えるかという検討は必要だが、高校生の知識が不足しているという前提で、企業がやることと行政がやることの説明があれば良いと思う。

<森川座長>

- ・ 次に、生徒向けのアンケート案について議論したい。

<事務局>

(生徒向けアンケート案 説明)

<森川座長>

- ・ 今回の授業を受けた生徒向けのアンケート案について、何かご意見やご質問はあるか。

<荒木委員>

- ・ 「市役所」という表現を使った意図はあるか。「京都市」の方が分かりやすいのではないかな。

<事務局>

- ・ 当初、「京都市政」という表現も検討していたが、高校生にとっては堅い印象になるため、イメージしやすい表現にしたいと考えている。

<松井委員>

- ・ 同じく「市役所」の表現が一番引っかかっている。「京都市」と書けば市政を含めた広いイメージを持つことができるが、「市役所」は庁舎の建物自体をイメージしてしまう。

<事務局>

- ・ 京都市外から通う生徒もおり、汎用性を持たせるために、京都市に限らず「市役所」としている。

<篠原副座長>

- ・ それであれば「市役所」よりも「行政」とした方が良いと思う。「公共」の教科書でも「行政」という言葉が使われているため、それに合わせてはどうか。
- ・ また、「取組」という部分も分かりづらい。Q6の「今回の取組」の表現を「今回の授業」と改め、行政の政策・施策的な意味合いと、授業の取組の意味合いが混同しないようにした方が良い。
- ・ Q3の「まちづくり活動」が出てくると、授業で取り組んだテーマとレイヤーが変わっている印象を受ける。市役所の取組とまちづくり活動を分けてはどうか。

<事務局>

- ・ 自分のためだけではない「共助」のような大きな括りで、高校生が今回の授業を受けて心が動いたのか聞いてみても良いかと考えている。

<森川座長>

- ・ Q3の質問の内容が、今回の授業の達成目標と飛躍しているのではないかと感じる。例えば、今回の授業で検討した社会課題について、自分が実際に行動したいと思ったかどうかという問いかけをした方が良いのではないかなと思う。

- ・ ロジックモデルをまだ組めていないが、アウトカムに直結する質問であるため、乖離が無いように気をつけなければならない。

<事務局>

- ・ 誘導のようになってしまうかもしれないが、もう少し細かく分けて、まずこれを聞き、その展開として次の問いを出し、最後の展開として大きな質問をするイメージになるか。

<森川座長>

- ・ 誘導という意味で言うと、このアンケートは市民参加することが正しいという価値観を前提として作成されている。アンケート内容はもう少しニュートラルな立ち位置から作成した方が良いのではないか。
- ・ 今回の高校生の発表は、市政を素直にとらえた内容であったと感じるが、中には現状の市役所の政策を批判的にとらえる視点を持っている生徒もいるだろう。その生徒から見ると、アンケートの組み方に違和感が出ないか。

<事務局>

- ・ そういった部分は問いの表現でカバーできそうである。厳しい意見をいただき、授業内容を改善していく方がアンケートをとる意味があると思っている。
- ・ 市民参加推進フォーラムの委員の皆様から、このような表現の方がよりフラットであるというようなご意見をいただけるとありがたい。

<森川座長>

- ・ アンケート用紙の冒頭に、今回が初めての授業で率直な感想を書いてほしいというような、アンケート趣旨を書いておく仕掛けをするだけでも変わるかもしれない。

<三宅委員>

- ・ 自身の活動の中でも、ニュートラルな視点でアンケートを作成するようにしている。生徒は、良いと答えたほうがいい質問には「良い」と答えるが、「実際に自分で行動しようと思いますか？」と問うと「いいえ」という回答になる。そのギャップが出てくる場所に留意が必要である。

<荒木委員>

- ・ 三宅委員と事務局からの意見を踏まえると、Q3がかなり限定的な聞き方であり、その前にもう一つ質問を加えて回答結果の差を見ることで、京都市の取組がまだ高校生に響くものになっていないといったことが示唆されることになるため、そのような問い方をしても良いと思う。

<平田委員>

- ・ 今日の発表の様子を見ていると、高校卒業後、大学に進学後も活動をいかに続けられるかが重要であると思う。それをアンケートの質問項目に落とし込めたら良いと思う。今後、大学で個人的に実際に取り組むとしたら何をしたいかという長期的な視点の質問項目を作ってはどうか。

<事務局>

- ・ 高校生を卒業した次の段階も非常に大切であるが、今回の授業に関しては、公共の授業と連携したことで、高校生の市民参加の裾野拡大に寄与できたのかを確認するアンケートにしたい。

<森川座長>

- ・ 今回のアンケートに関しては、それが第1義であるのは賛成である。

<村田委員>

- ・ アンケートは質問数が多すぎると回答者がしんどくなる。質問項目数については、現在の案のとおりで良いと思う。授業目的やアンケートの趣旨の説明文を冒頭に記載した上で、忌憚ない意見を書いてもらえるようにすれば良いと思う。

<松井委員>

- ・ 自分が回答するとすれば、Q3とQ4の質問が反対の方が回答しやすいと思う。Q3の質問内容が唐突であると感じた。

<事務局>

- ・ いただいたご意見をもとにアンケート案を修正する。

<森川座長>

- ・ 授業から時間が経つと高校生の熱が冷めてしまうため、早めをお願いしたい。
- ・ 本日の議題は以上である。事務局にお返りする。

### 3 閉会

<事務局>

第3回については、年末から1月にかけて実施予定である。

以上をもって、市民参加推進フォーラム令和5年度第2回会議を終了する。本日はありがとうございました。

以上